

源平盛衰記における漢籍受容の様相

CHEN, Chen / 陳, 晨

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

86

(発行年 / Year)

2023-03-24

(学位授与番号 / Degree Number)

32675甲第559号

(学位授与年月日 / Date of Granted)

2023-03-24

(学位名 / Degree Name)

博士(学術)

(学位授与機関 / Degree Grantor)

法政大学 (Hosei University)

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00026677>

博士学位論文
論文内容の要旨および審査結果の要旨

氏名	陳 晨
学位の種類	博士（学術）
学位記番号	第813号
学位授与の日付	2023年 3月24日
学位授与の要件	本学学位規則第5条第1項(1)該当者(甲)
論文審査委員	主査 教授 小秋元 段 副査 准教授 遠藤 星希 副査（学外） 駒澤大学教授 櫻井 陽子

源平盛衰記における漢籍受容の様相

1. はじめに

陳晨氏提出の博士論文「源平盛衰記における漢籍受容の様相」は、『平家物語』の一異本である源平盛衰記における漢籍の受容のあり方を考察する諸論考によって構成される。はじめに本論文の編成を示す。

序 章 本論文のねらいと背景

- 一、本論文の目的
- 二、源平盛衰記所引の中国故事・表現をめぐる先行研究
- 三、本論文の概要

第一章 『平家物語』における『後漢書』の受容について

はじめに

- 一、和製類書を介した『後漢書』の受容
- 二、日本における『後漢書』の受容について
- 三、源平盛衰記における『後漢書』直接依拠の可能性
 - ア、晏嬰・程嬰・魯連・包胥
 - イ、微子・項伯・周勃・霍光
 - ウ、真旧の主に背く
 - エ、賢聖障子に描かれた三十二人
 - オ、真竜失勢同蚯蚓
 - カ、後漢書に見えたり

むすび

第二章 源平盛衰記における『史記』の受容について

はじめに

- 一、源平盛衰記における「中世史記」の世界
- 二、源平盛衰記における『史記』の引用
 - ア、頼朝・義仲の勲功

イ、河陽之蒐春秋猶忌之

ウ、晋文勃鞞・斉桓管仲

むすび

第三章 源平盛衰記所載の呉越合戦記事をめぐって

はじめに

一、呉越合戦記事の日本での受容に関する研究

二、『太平記』と源平盛衰記との異同

三、源平盛衰記の呉越合戦記事について

ア、勾踐挙兵の端緒

イ、勾踐嘗尿・礼蛙

ウ、木樵り草刈る

エ、会稽山（蚕山）の謂れ

むすび

第四章 源平盛衰記における仏典の受容について

はじめに

一、竜子ハ小ナレ共雲ヲ起ス事モ大竜ニ同ジ

二、水旱不調

むすび

補 論 『平家物語』における漢文的表現の典拠について

はじめに

一、人所帰者天所与、人所叛者天所去

二、身ヲ全シテ君ニ仕ヨ

三、楊貴妃帰

四、鼠巢於樹

五、趙武挙以私讐、所奚薦以己子

六、非常之断人主専之

むすび

終 章 むすびと展望

以上のとおり、本論文は序章・終章のほか、四章にわたる論考と一篇の補論から成る。以下、論文の概要と評価について述べてゆく。

2. 論文の概要

はじめに、本論文の概要を章立てに沿って説明する。

序章では、本論文の目的と研究の背景が述べられる。源平盛衰記をはじめとする『平家物語』諸本には、漢籍に依拠したと思しい故事・表現が多数存在している。また、これらのうち、多くは直接漢籍によったものではなく、唱導資料、古典注釈書、和製類書など、日本国内で著された二次的文献からの引用であることが知られている。しかし、『平家物語』諸本中、最も長大な本文をもち、独自の記事・詞章を多くもつ源平盛衰記においては、漢籍的故事・表現の出典調査が必ずしも十分になされていない側面がある。そして、それ

らのなかには、日本国内で著された二次的資料ではなく、漢籍そのものに依拠したものもあるのではないかという問題提起を行う。

第一章では、源平盛衰記における『後漢書』の受容を論じる。この問題をめぐっては、すでに遠藤光正氏が源平盛衰記には『後漢書』からの引用が十六例あり、そのうちの十二例が『世俗諺文』『玉函秘抄』『管蠡抄』『明文抄』などの和製類書に所見のあることを指摘している（「『源平盛衰記』に載録の漢籍と引用章句の用法について」『東洋研究』第110号、1994年）。これに対して陳晨氏は、源平盛衰記には和製類書には見られない、複数の『後漢書』依拠が想定される詞章があることを明らかにする。一例をあげれば、巻二十「佐殿大場勢汰」の「昔晏嬰発勇於崔杼、程嬰顕義於趙武」、「昔魯連弁言以退燕、色胥単辞以存楚」のごとき漢籍的な文飾表現である。詞章を構成する各故事の原拠は『晏子春秋』『史記』『淮南子』等に求められるのだが、源平盛衰記同様、故事を圧縮して列挙する表現が、『後漢書』巻五十二「崔駰伝」に「晏嬰発勇於崔杼、……魯連弁言以退燕、包胥単辞而存楚、……程嬰顕義於趙武」として認められる。このような事例が源平盛衰記には複数あるという。また、このほかにも、巻二「二代后附則天皇后事」には宮中の賢聖障子に描かれた三十二人の名を記す条があるが、日本の通例の理解による人名ではなく、『後漢書』巻二十二「馬武伝」所載の南宮雲台に描かれた功臣名によっている事例や、巻十七「始皇燕丹・勾踐夫差」で『史記』由来であるはずの燕丹説話の末尾にあえて「後漢書ニ見エタリ」と注記し、同書への殊更な関心を示すかと思しき事例があることも紹介する。これらの事例をあげて陳晨氏は、源平盛衰記が独自に『後漢書』そのものを受容した可能性があったこと、源平盛衰記が『平家物語』諸本のなかでもとりわけ『後漢書』に関心を有していたことを指摘する。

第二章では、源平盛衰記における『史記』の受容を論じる。この問題をめぐってもすでに先行研究があり、源平盛衰記では『唐鏡』を経由したり（牛尾久美子氏「『源平盛衰記』の中国故事説話について」『国文目白』第10号、1971年、ほか）、日本で独自に加工され、『和漢朗詠集永濟注』等に所収のものに代表される中国故事、所謂「中世史記」を受容したり（黒田彰氏『中世説話の文学史的環境 正・続』和泉書院、1987・1995年）することにより、『史記』の故事を受容する姿勢が顕著であることが知られている。陳晨氏は源平盛衰記が『後漢書』に直接依拠する事例があることに鑑み、『史記』についても直接受容した可能性があるか否かを検証する必要があるとして、本章を設ける。源平盛衰記には巻三十二「法皇自天台山還御事」に「昔誅諸呂立文帝、陳平雖為本謀、周勃依有戦功、周勃之賞已越陳平」のごとき、故事を圧縮した文飾表現があり、『史記』巻五十六「陳丞相世家」に近い表現がある。陳晨氏は、このような事例が三例あると指摘するが、源平盛衰記と『史記』の詞章は完全には一致せず、源平盛衰記と『後漢書』との共通箇所と比べると、事例そのものが少ないことにも注意を払う。これらのことから、陳晨氏は『史記』に由来する故事・詞章は、和製類書や「中世史記」、その他の二次的文献を通じて日本で広く流通していたため、源平盛衰記は直接原典にあたらなかったのではないかと考察し、『後漢書』の事例とは一線を画すと結論づけている。

第三章では、源平盛衰記巻二「会稽山」、巻十七「始皇燕丹・勾踐夫差」に収められる呉越合戦記事について考察する。日本で受容された呉越合戦説話は『太平記』所収のものが著名だが、源平盛衰記の同記事では、①呉越の戦争の発端が、蚕山とも呼ばれた会稽山

で、両国の民が桑を争ったことに由来すること、②両国の戦争の経緯として、越王允常が呉王闔閭を殺し、闔閭の子夫差の復讐を恐れて允常の子勾踐が挙兵したとすること、③捕らえられた勾踐が夫差に従属する様子を「木ヲコリ草ヲカラヌ計ニ奉公シケレバ」（巻二）、「木ヲ樵水ヲ汲マデハナケレ共、二心ナク仕ヘケレバ」（巻十七）と、類似する特徴的な表現で記すこと、④勾踐が病となった夫差の尿を飲んだのは、越に帰国するための計略であったとすること、⑤勾踐が蛙に敬礼したのは、勇士を賞する意味をもっていたとすること、に特徴があるとする。このうち、②の記述は『和漢朗詠集永済注』のうち龍谷大学本に見える記事であることを指摘し、源平盛衰記の呉越合戦記事の背景に『和漢朗詠集』注釈書がもつ「中世史記」の世界があること、さらには源平盛衰記に影響を与えたのが龍谷大学本のごとき永済注であったことを明らかにする。一方、③④⑤の特徴は『呉越春秋』に共通しており、日本における資料に依拠したと考えるより、同書にもとづくものと指摘する。加えて、①は他文献に記載を見ない特異な言説だが、『史記』卷三十一「呉太伯世家」、卷六十六「伍子胥列伝」、『呉越春秋』卷三「王僚使公子光伝」に、呉と楚の境で蚕を飼う女が桑を争い、両国の戦争に発展したという記述があることを指摘する。そして、こちらも踏まえれば、源平盛衰記は『呉越春秋』に依拠した可能性はさらに高まるとしている。このような考証を経て、源平盛衰記の呉越合戦説話は「中世史記」と『呉越春秋』双方に依拠するとの結論を導いている。

第四章では、仏典に依拠したと見られる部分の典拠について考察する。源平盛衰記には仏典に依拠する部分も多く見られ、先行研究でも典拠として『説法明眼論』『摩訶摩耶經』『涅槃經』『観心略要集』『仁王經』『法句經』『大般若經』『金剛經』『観仏三昧海經』『慧苑音義』『法華經』『阿闍世王受決經』等の名があげられている（遠藤光正氏「源平盛衰記に採録の漢籍と引用章句の用法について」前出）。だが、出典未詳の事例も少なくなく、本章ではその解明を試みる。まず、「竜子ハ小ナレ共雲ヲ起ス事モ大竜ニ同ジ」（巻十一「金剛力士兄弟事」）という成句をとりあげ、類似する内容の句が『法苑珠林』巻十九に「龍子雖小亦不可輕。……龍子雖小能興雲、由興雲故致雨雷電霹靂」とあることを指摘する。ただし、これを以て源平盛衰記が『法苑珠林』に依拠したと証明することは難しく、両者に存在する類似表現には、しばしば字句の相違が認められるという。その例として、これも従来出典未詳であった「仏説ニ云、我法滅尽、水旱不調、五穀不熟、疫氣流行、死亡者多ト」（巻二十七「天下餓死」）という表現があげられる。類句が『法苑珠林』巻九十八に「水旱不調、五穀不熟、災疫流行、死亡者衆」とあるが、『法苑珠林』の「災疫」を源平盛衰記は「疫氣」に作る。そして、源平盛衰記のこの句は『仏説法滅尽經』に異同のないかたちで見られることも指摘している。このように、源平盛衰記には『法苑珠林』と類似する表現はあっても、直接の依拠はなお疑わしく、仏典の典拠は『仏説法滅尽經』をはじめ、さらに探究する余地があるとしている。

以上のように、第一章から第四章までは源平盛衰記に特化し、漢籍受容の様相を考察する。そのうえで、『平家物語』諸本に視野を広げ、出典未詳とされてきた漢籍的表現の考証を行うのが補論である。ここでは、諸本の巻一に見られる著名な成句「身ヲ全シテ君ニ仕ヨ」の原拠が『晏子春秋』外篇上「高子問子事靈公莊公景公皆敬子晏子対以一心」の「庸知其能全身以事君乎」であることを指摘するように、漢籍を博搜して典拠を見いだす。一方で、延慶本巻六、源平盛衰記巻二十七に見られる「非常之断人主専之」といった語句に

着目し、その典拠が『令集解』『考課令』にあることを指摘し、『平家物語』の漢籍的表現の基盤には従来注目されてこなかった国書も存在することを明らかにする。

以上を踏まえ、終章では源平盛衰記の漢籍受容では、『後漢書』や『呉越春秋』などの事例のように、漢籍への直接依拠が窺える事例があること、そして、これら漢籍を自在に自己の文章に鏤め、『中世史記』等、日本の二次的文献に由来する中国故事とつなぎあわせることにより、『平家物語』諸本に対し、より特徴ある表現世界を形成していることを指摘する。そして、源平盛衰記が漢籍を摂取するにあたり、古鈔本、宋元版いずれに依拠したのかといったことや、膨大な漢籍的表現を含む唱導資料と源平盛衰記との関係はさらに追尋すべきであることなど、今後の検討課題についても触れ、論を締めくくる。

3. 総合的評価

『平家物語』をはじめとする軍記物語には、日本中世の他の文学・芸能作品同様、多くの漢籍由来の故事や詞章が含まれている。こうした学術性が中世散文の一つの特徴であるが、必ずしも作者たちは一つ一つ原典にあたり、記事を執筆していたわけではない。直接の典拠になったのは、寺院における唱導資料、『和漢朗詠集』注釈書に代表される幼学書、漢籍の金言佳句を広く収集した和製類書など、日本で制作された二次的文献であることが極めて多い。

『平家物語』は本文を異にする多数の伝本を抱えているが、漢籍由来の故事・表現の摂取をめぐる上記の傾向は、伝本ごとに共通に見られるところである。特に、本文の分量が多い読み本系の諸本では、古態の本文を多く有するとされる延慶本において唱導資料との関わりが深く研究されており（牧野和夫氏『延慶本『平家物語』の説話と学問』思文閣出版、2005年、『日本中世の説話・書物のネットワーク』和泉書院、2009年、ほか）、陳晨氏が考察対象とする源平盛衰記においても、『和漢朗詠集』注釈書が伝える「中世史記」との関係（黒田彰氏『中世説話の文学史的環境 正・続』前掲）、和製類書との関係（遠藤光正氏「『源平盛衰記』に引用の漢籍の典拠 一～八」『東洋研究』第77・80・85・87・91・94・96・104号、1986～92年、「『源平盛衰記』に載録の漢籍と引用章句の用法について」前掲）が鮮明であることが知られている。

こうした成果のうえに立って、中世文学研究の世界では、『平家物語』における漢籍受容は直接原典によるのではなく、日本で制作されたに二次的な文献に依拠することが特徴として認識されてきた。これに対して陳晨氏は、源平盛衰記の漢籍受容には漢籍そのものによったとしか考えられない事例を洗い出すことにより、源平盛衰記の編者が漢籍を閲覧できる環境に身を置き、それを自在に文章中に活用することができるほどの素養をもっていたことを論じる。この点は従来の研究に一石を投じるものである。

具体的には第一章において、出典未詳とされてきた記事を複数とりあげ、これらが『後漢書』をもとにすることをまず指摘する。陳晨氏がとりあげた箇所は、現在のところ日本における二次的文献に所見はなく、『後漢書』が源平盛衰記の直接の典拠となった蓋然性は高そうである。加えて、賢聖障子に描かれたのが南宮雲台に描かれた功臣三十二名であるとする独特の言説も『後漢書』の記述に符合し、源平盛衰記と『後漢書』は無関係ではないように思われる。

また、第三章において、源平盛衰記の呉越合戦記事に『呉越春秋』依拠の可能性を指摘

した点も重要である。呉越合戦説話は『太平記』所収のものに代表されるように、日本でも著名な中国故事である。しかし、源平盛衰記に見える蚕山の紛争のエピソードや「木ヲコリ草ヲカラヌ計ニ」といった表現は国書に他例を見ず、『呉越春秋』の記事を活用したことが十分想定される。加えて、本章では、呉越の合戦の来歴を述べるくだりが、『和漢朗詠集永済注』のうちでも龍谷大学本の独自記事に一致することを指摘した点も重要である。源平盛衰記と『和漢朗詠集永済注』との関係はすでに知られているところだが、個別の伝本との関係が明らかになったことは、研究の進展を意味する。あわせて、源平盛衰記の中国故事がかかる「中世史記」をもとにしつつも、漢籍そのものを交えて再構築されているのではないかという見方を示したことも、今後の研究に影響を与えるであろう。

このように、陳晨氏の調査は源平盛衰記が『後漢書』『呉越春秋』に直接依拠した可能性があることを指摘する点で成果をあげているが、他にも従来出典未詳とされてきた漢籍的詞章の典拠を明らかにしている点でも貴重である。第四章や補論では『仏說法滅尽經』や『令集解』などへ注目しているが、今後は関連する資料に視野を広げて研究を進めることにより、さらなる成果が期待できよう。源平盛衰記をめぐるのは、市古貞次氏・大曾根章介氏・久保田淳氏・松尾葦江氏ほかによる中世の文学『源平盛衰記 一〜』（三弥井書店、1991年〜、未完）、早川厚一氏ほかによる「『源平盛衰記』全釈（一一巻一一一）〜」（『名古屋学院大学論集 人文・自然科学篇』第42巻第2号〜、2006年〜、未完）といった注釈書が刊行され、出典研究が進みつつある。また、同じ読み本系をもとに、延慶本注釈の会編『延慶本平家物語全注釈 第一本（巻一）〜第六末（巻十二）』（汲古書院、2005〜2019年）も出典調査を周到に行っている。陳晨氏の論考は、これらの仕事を補完する役割を果たしている。もちろん、その成果の背後には、近年、急速に整備が進む漢籍データベースの恩恵がある。だが、こうした文明の利器を使いこなすためには、第一に源平盛衰記の本文を精読し、知悉することが必要であることは付言しておいてもよいだろう。

一方で課題も残る。第一章では、源平盛衰記の『後漢書』受容箇所を指摘するにあたり、それが延慶本でも共有されている事例も紹介している。陳晨氏は延慶本が源平盛衰記に対して先行するという前提を想定しているようだが、それでは『後漢書』の享受が源平盛衰記を特徴づける現象として十分に評価することはできなくなるであろう。延慶本の本文はそのすべてが古態をとどめるものであるとはかぎらないことが実証されており（櫻井陽子『『平家物語』本文考』汲古書院、2013年）、当該箇所についても延慶本と源平盛衰記のどちらが古態の本文をとどめるのか、検討する必要がある。こうした手続きを経ることで、源平盛衰記の『後漢書』受容箇所の評価は正当に行えるものと思われる。

つぎに、第二章では、『後漢書』とは対照的に『史記』について、源平盛衰記は直接参照することはなかったと説く。陳晨氏はこの現象を、『史記』にかかわる故事は「中世史記」をはじめとする二次的文献から摂取したからだとする。確かに、日本中世において「中世史記」にもとづく知識・言説は広く流通したので、この説明にも一理はあるが、『後漢書』を繙読していた源平盛衰記編者が、なぜ『史記』については原典を顧慮しなかったのか、やはり疑問は残る。

最後に、このことと関連して、本論文は源平盛衰記が直接漢籍を参照していたという方向性を打ち出すものであるが、日本中世の知識人にとって、膨大な漢籍を閲覧し、適切な語句を拾いあげてゆくのは至難の業であったろう。やはり、源平盛衰記でもしかるべき二

次の文献を活用していたのではないかという疑念が拭えない。特に、故事を凝縮したかたちで列挙する文飾表現は唱導や文書類にもしばしば見られることから、今後、これらの方面の資料との関わりについても考察してゆく必要があると考える。

およそ以上のような課題は残るものの、陳晨氏が本論文で示した新たな知見には、それを上回る価値がある。総合的に見て、博士論文としてふさわしい内容をもつものと評価したい。

4. 最終試験の成績

本学学位規則により、最終試験として 2022 年 10 月 1 日に公開の場で口頭試問を行った。陳晨氏からは論文内容に関して適切な説明が行われ、審査小委員会委員および出席者の質問に対して的確な回答がなされた。その結果、審査小委員会は最終試験の結果を合格と判断した。

5. 結論

審査小委員会は、陳晨氏提出の博士論文「源平盛衰記における漢籍受容の様相」を上記のように評価し、陳晨氏が博士（学術）の学位を授与される資格を有するものとの結論に達した。

以 上